

忠臣蔵と笠間市に縁があることをこ存じでしたか？

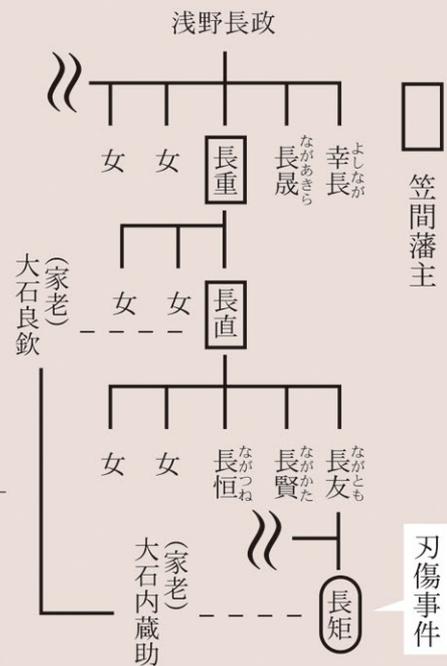
特集 笠間と忠臣蔵



江戸時代中期に起こった、浅野内匠頭の刃傷事件とその家老大石内蔵助ら四十七人の赤穂浪士による吉良邸討ち入りの事件。この2つが「忠臣蔵」元禄事件です。自分の身を顧みることなく、主君の仇をとって恩に報いた「武士道」の精神が、太平の世に飽き飽きしていた市民の心を大きく揺さぶり、その後、歌舞伎や錦絵などで取り上げられるなど、人気を呼びました。

しかし、近年は映画やドラマなどで忠臣蔵が取り上げられることが少なくなり、若者の認知度が下がっている傾向にあるようです。400年もの間、語り継がれてきた物語と笠間市との関わりを知って、忠臣蔵を身近に感じてみましょう。

〔浅野家家系図〕



笠間と忠臣蔵の縁

浅野内匠頭長矩の曾祖父である長重、祖父である長直が二代にわたって笠間藩を治めていました。その筆頭家老が、後に四十七士を率いた大石内蔵助の父良欽です。大石良欽が笠間藩時代に住んでいた屋敷跡が、今も佐白山の麓に残っています。後に長直は一六四五年(正保2)、赤穂藩主となりました。

また、討ち入りに加わった赤穂浪士の中には、笠間生まれの吉田忠左衛門、小野寺十内、堀部弥兵衛の3人がおり、中でも堀部弥兵衛は、最年長の76歳でした。想いの強さと年齢のためか、終始急進派として復讐を唱えました。笠間から赤穂へと領地替えがあつたにもかかわらず、主君への忠義を果した義士の存在を、私たちは後世に伝えていくべきではないでしょうか。

「君辱めらるれば臣死す」

主君がはずかしめを受けるようなことがあれば、その臣たるものは命を投げ出して主君の恥をそそがなければならない。

■ あらすじ

事件の発端

一七〇一年(元禄14)、江戸城での天皇の使者(勅使)を迎える儀式で、殿中の儀礼指南役(高家)の吉良上野介は、勅使

饗応役の浅野内匠頭に江戸城にある松の大廊下で斬りつけられました。これは、内匠頭からの進物に大変不満があった上野介が日ごろから意地悪く当たり、これに怒った内匠頭が起した事件です(刃傷事件)。

大事な儀礼の場を乱されて怒った將軍 徳川綱吉は、詳しい取り調べもせず内匠頭だけに切腹を命じました。即日、内匠頭は切腹。しかし、上野介はおとがめなしという「喧嘩両成敗」の鉄則を破る不公平な処分を下しました。

主君の切腹と地域取り潰しにより、家臣たちは赤穂城を明け渡しました。浪人となった旧家臣たちは、お家再興を目指す者と仇討ちを唱える急進派とに分かれました。

内輪もめ

内蔵助は、仇討ちの時期を模索する堀部安兵衛らの急進

派を説得するため、江戸に向かいました。説得の甲斐があり、「二周忌となる3月までは、目立つ行動はせずひたすら我慢しよう」という形でいったん落ち着きます。

約束の3月、京都の山科に同志が集まりましたが、「浅野家再興のために、現在幕府から謹慎の刑を言い渡されている内匠頭の弟 浅野大学への処分がどうなるか幕府の判断を待とう」ということになり、これを聞いた急進派は大いに反発。あわや分裂の危機に陥ります。

そして7月、大学が幕府から広島浅野本家へ拘禁の刑を言い渡されたことで、浅野家の立て直しは絶望的となりました。この状況を受けていよいよ内蔵助は、同志を京都の円山に集めて仇討ちを実行に移す準備をはじめ、そのことにより同志の結束が固まりました。

赤穂義士

内蔵助は、「自分に従う」という誓約書(神文)を提出していた同志たちの本心を確認するために、大高源五らを使って彼らに大学の処分を知らせるとともに、誓約書を返し、断った

者だけに仇討ちすることを打ち明けました。

仇討ちに参加する赤穂の同志が次々と江戸へ集結するなか、源五が一七〇二年(元禄15)12月14日に吉良邸で茶会があることを察知し、主君の月命日でもあったため、討ち入りがその日の夜に決定しました。

仇討ち執行とその後

仇討ち当日の夜、同志が集結し午前4時に討ち入りが行われました。上野介を討ち取った後、主君が眠る泉岳寺に向かい、その墓前に上野介の首を供え仇討ちの成功を報告しました。

その後、彼らは幕府に自首し、内蔵助を含め仇討ちに参加した計47人が、翌年2月4日に切腹となり、吉良家は取り潰しとなりました。

また、浅井家は將軍であった綱吉が死去した後、大学の罪が許され預かりの身が解かれます。大学は、幕府から安房国朝夷郡・平郡(現在の南房総市の一部)に500石を与えられ、お家再興が叶いました。

あらすじ(完)

忠臣蔵が結ぶ縁

姉妹都市である赤穂市をはじめ、笠間市は忠臣蔵をきっかけにさまざまな自治体と交流をしています。

平成元年、兵庫県赤穂市の呼びかけによって、全国の「赤穂義士ゆかりの地」の所在自治体が、親善と友好を深めながら情報交換を行い、地域の活性化と発展向上のため相互協力していくことを目的に、『義士親善友好都市交流会議(忠臣蔵サミット)』が創設され、笠間市も参加しました。現在、同サミットには全国30の自治体が名を連ねており、毎年いずれかの自治体を開催地とした『忠臣蔵サミット』が開催されています。平成27年10月には、第27回のサミットが赤穂市で開催されました。

また、東京スカイツリー内「産業観光プラザ すみだまち処」では、毎年12月に8つの自治体に参加して「忠臣蔵ゆかりの自治体展」を開催しています。忠臣蔵にまつわるそれぞれの物語とそこに隠されたさまざまな真実を知ることができる企画展となっています。



忠臣蔵ゆかりの自治体展の様子



忠臣蔵サミット in かさま (平成20年開催)



東日本大震災に伴う赤穂市からの支援

笠間の歴史を知り、 ふるさとへの誇りと親しみ、愛着を持ってほしい

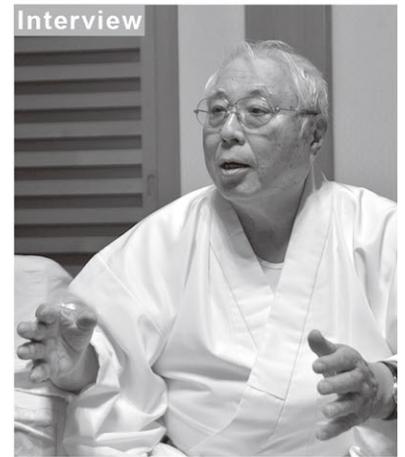
笠間義士会
昭和5年、赤穂義士をはじめとする先人たちについて研究を進め、笠間の歴史を学びながら、次世代を担う若者たちに歴史を知る機会を与えるという目的で、笠間稲荷神社先代宮司である故 瑞比古さはなわみずひこんをはじめとする5名によって発足しました。主な活動は、佐白山にある大石内蔵助の銅像の清掃、歴史や法律の勉強会の実施、義士パレード・そば講の開催を行っています。また、後世に残したい旧町名の石碑や指定文化財の由緒板の設置なども行いました。当初の会員数は40人程度でしたが、現在では約80人にまで増えました。「先人を知りながら、住人同士がお互いに良く話し合い、ともにまちづくりをし

ていこう」というのが、義士会の考えのひとつです。今があるのは、昔の人がその土地を大切にしてきた歴史があるからにほかなりません。歴史を知るとは、郷土への愛着心を育てることにつながります。そのための入口のような存在として、笠間義士会は活動を続けていきたいと考えています。

大石内蔵助に学ぶこと
大石内蔵助の尊敬するべきところは、物事を進めるうえでさまざまな意見に耳を傾け、慎重に熟慮し、時期を見て行動を起こしたことです。そしてその行動が、多くの人に共感を得られるようなものであったことです。多くの日本人が忠臣蔵に惹かれたということは、大石内蔵

助のとった行動はたくさんの方が学ぶべきものだったということなのではないでしょうか。自分の利益を優先すると同時に、その場しのぎの行動をとってしまう人の多い昨今、若い人はもちろん、私たちも、彼らの姿勢を模範として生活に活かせればと思います。

歴史を知ること
笠間藩を治めた藩主の多くは、国替えなどで赤穂をはじめとする全国各地に渡っています。そのような事を知ると、関わりのある場所に行ったとき、「もつとその土地のことを知ってみよう」という興味から、旅の楽しみが増えると思います。そして、その土地のおもしろい取組みを地元を持ち帰り、自分たちでも

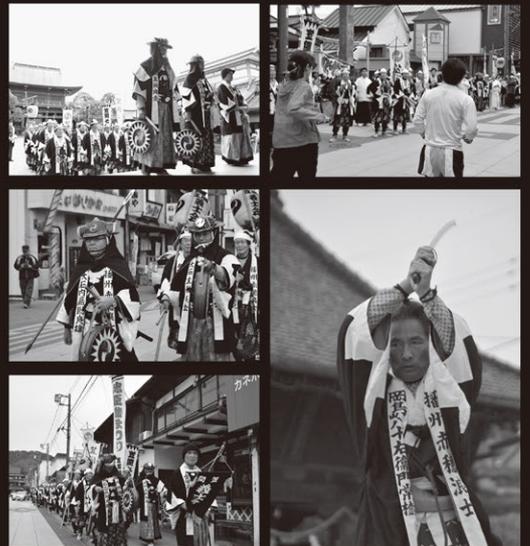


はなわ はるお
笠間義士会長 塙東男さん

平成12年から笠間義士会長に就任。笠間稲荷神社宮司を務める。平成27年には、国際交流の推進に貢献したとして、茨城県表彰を受ける。

- 昭和5年 笠間義士会発足
- 日中戦争・太平洋戦争[休止]
- 38年 義士顕彰碑を設置
- 41年 第1回そば講開催
- 47年 大石内蔵助の銅像を設置
- 48年 笠間義士会 再開
- 平成27年 第50回そば講開催





1	2	5
	3	6
	4	

1. 笠間義士会の皆さん
2. パレード前の拝礼
3. 先頭を歩く大石内蔵助役の会員
4. 門前通りでのパレード (12月13日)
5. 同日に開催されたかさま陶芸の里ハーフマラソンの応援 (12月13日)
6. 居合演舞

義士の足跡をめぐるなら

下図は、江戸時代中期から存在している道と現在の地図とを重ね合わせたものです。約250年たった今も、昔の道がほぼ残っている様子がわかります。同じ道を、義士たちに思いをはせながら歩いてみては。



3 大石内蔵助邸跡

大石内蔵助の祖父で、笠間藩家老だった大石良欽の邸宅跡。
住所：笠間995-13



1 笠間城跡

笠間城は、天守曲輪を持ち、石垣が構築された城郭として注目されている山城です。
住所：笠間3616



4 笠間稲荷門前通り

毎年12月には、赤穂義士に扮した笠間義士会の皆さんがパレードを行います。
住所：笠間稲荷神社周辺



2 佐白山ろく公園

笠間時朝によって構築された笠間城の下屋敷、時鐘楼、大石内蔵助の像があります。
住所：笠間1015-2

「歴史と文化に彩られたまち 笠間」。調べてみると、私たちのふるさとはさまざまに逸話が隠れています。自分たちの地域の歴史を知って愛着を持ち、その事実を知らない後世へ伝えていくことが、笠間で暮らす私たちにこれから求められていることではないでしょうか。

特集「笠間と忠臣蔵」(元)

編集後記

大石内蔵助の銅像の存在から、笠間市と忠臣蔵にゆかりがあるということを知っていても、それが実際にどのような関係なのかを知っている人は少ないのではないのでしょうか。どんなに興味深い史実でも、その話を聞く機会がなければ伝えることはありません。笠間義士会のように、その機会を提供しようと活動を続けてくれる存在はとてもありがたいですね。

【参考文献】

「実証義士銘々伝」(二〇〇五)
赤穂大石神社宮司 飯尾義明